東大文

SAINSBURY INSTITUTE for the Study of Japanese Arts and Culture セインズベリー日本藝術研究所

平成28年度

# 文学部夏期特別プログラム

2016年9月9日–23日

東京の部・北海道の部

# 報告書

# Report on 2016 Special Summer Program at the Faculty of Letters

September 9-23, 2016
in Tokyo and Hokkaido

THE UNIVERSITY OF TOKYO

# 目 次

## 1. 巻頭挨拶

交流の跡、交流の兆
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長　熊野 純彦 …… 2
BREXIT、トランプ大統領時代の国際交流の意義
セインズベリー日本藝術研究所　統括役所長　水鳥 真美 …… 3

## 2. プログラムの概要

サマープログラムの概要 …… 4

## 3. プログラム実施内容

東京の部　東京大学大学院人文社会系研究科　特任助教　國木田 大 …… 5
常呂の部　東京大学大学院人文社会系研究科　准教授　熊木 俊朗 …… 7

## 4. 受講者レポート

1．Tumi Grendel Markan【英国】 …… 10
Sabrina Fantuzzi【スイス】
Frances Isabel Iddon【英国】
Dessislava Lyoubomirova Veltcheva【ブルガリア】
2．大谷 ちひろ【文学部４年】 …… 22
川口　真【法学部４年】
山口 陽子【文学部３年】
岡崎 咲弥【文学部３年】
松尾 晶穂【教養学部１年】

## 5. 総 括

まとめと今後の展望
東京大学大学院人文社会系研究科　副研究科長　佐藤 宏之 …… 29

# 交流の跡（あと）、交流の兆（きざし）

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長
熊 野 純 彦

1955 年、言語学者の服部四郎が常呂の地に立ったのは、アイヌ語の調査のためである。服部のもとに、かの地の大西信武氏が訪れた。氏は夙に常呂の遺跡を発見しており、その保護のため東大の考古学者の協力を求めていたのである。服部はその言を聞き、同僚の考古学者・駒井和愛を現地に呼びよせた。旧常呂町と東大文学部との交流のはじまりである。航空機の利用はなお一般的でなく、夜汽車を乗りついで東京と北海の地を往復せざるをえなかった昭和 30 年代に、こうして、常呂の町のひとびとと文学部とのあいだで最初のかかわりが生れたことになる。そののち両者の関係は年を追って進展し、また深化した。交流は地を横断し、海峡を越える。いったん開始された交わりにとっては、双方をへだてる大地と海洋がむしろ両者をつなぐものとなった。

1965 年、常呂町は常呂町郷土資料館をひらき、東大文学部による発掘資料をひろく公開する。これが最初の常呂実習施設研究棟であった。1967 年、文学部は考古学研究室所属の助手一名を派遣し、いまにいわゆる「常呂研究室」がその歴史を開始する。ついで 73 年、文学部は、常呂町に附属北海文化研究常呂実習施設を新設し、同施設が旧常呂町（現北見市常呂町）を中心とする地域連携の拠点となって、現在にいたっている。常呂町と文学部とのあいだの交流が紡ぎあげた十余年にわたる時間が、ようやく文学部にとっての学外施設として、常呂の空間に可視的なかたちで結晶したわけである。以後、常呂町、やがてまた北見市と東京大学文学部は、双方ともに交流をひろげつづけ、今日におよんでいる。

3 年まえから、文学部と、連合王国ノリッチに所在する、セインズベリー日本藝術研究所とのあいだで交流がはじまり、両者は協定を取りむすんだ。現在の「夏期特別プログラム」を可能にしたのは、このあらたな交流関係、わけてもセインズベリー研究所による全面的な協力と支援によるところが大きい。東京と常呂とをむすび、したがってまた常呂町をも舞台のひとつとする交流のこころみは、すでに長い歴史を刻んでいる交流の跡に、未来にひらかれた交流の兆を示しはじめている。

常呂町に残された遺跡は、北海道ばかりでなく、サハリン・ロシア極東地域にまでひろがる北海文化のあかしであり、それ自体が、古来ひとびとが交流し、交易し、生を分かちあってきた時間の痕跡である。川は地に境界を引き、海は大地と大地とを切りわける。他方でしかし河川を辿ってひとは交流し、大海をわたってひとびとのあいだの交通が拓かれてきた。先史以来の交流の跡をとどめる北海の地が、いまあらたな交流の空間を啓き、交通の歴史を刻みはじめている。この交流が途絶えることなく継続されることを望んでやまない。

# BREXIT、トランプ大統領時代の国際交流の意義

セインズベリー日本藝術研究所　統括役所長
水 鳥　真 美

この交流プログラム実現につき、当時東京大学文学部長であられた小佐野重利教授と相談を始めた時の背景には、日本の大学の国際化という課題が存在していた。つまり、双方向の交流プログラムではあっても、どちらかと言えば日本国内からの要請に動かされたという事情があった。折しもスーパー・グローバル大学の選定が進んでいた時期だった。かねて言われている日本人大学生の内向き志向がどれほど深刻なのかは、定かでない部分がある。しかし、確かに当地大学のキャンパスの留学生は、圧倒的に中国人学生である。そこで、日本人学生を英国に引き出し、一方、日本に送り出す欧米人学生との交流を通じて日本の若者の目を外に向けることができれば、ということで協力協定が結ばれる運びとなった。第３回目となる今年夏のプログラムも成功裏に実施されたとの報告を頂いている。

ところがここにきて、事情は一気に変わった。今、国際交流事業に参加し、外に目を向ける機会を必要としているのは、英米の学生である。英国の欧州連合離脱決定、そして、トランプ次期米国大統領選出という世界を震撼とさせた二つの「事件」が発生したからである。英米両国の其々の決定の背景には固有の事情もあるが、寧ろ共通性が際立つ。居住地域の経済活動とそこから受ける恩恵、教育水準、人種、宗教、ジェンダー、世代といった様々な要因をまたがって存在する国の分断。「エスタブリッシュメント」、「専門家」と悪し様に呼ばれ、批判の対象となってしまったあらゆる権威に対する拒絶。そして、排外主義の高まり。ついこの間まで、日本にとって多様性を容認する社会のお手本とされ、民主主義、市場経済主義、人権尊重という基本的価値観を共有すると思われていた英国、米国において、今、不気味な異変が起こっている。

英国では、圧倒的多数の若者が欧州連合の一員であり続けることを望んだ。離脱を選び、自分たちの将来を奪った高齢者世代に対する恨みは深い。一方、米国でも 30 歳未満の 55%はヒラリー・クリントンを選択し、65 歳以上の 53%はトランプに票を投じている。これらの若者に今、必要なのは、国境に壁を作り、内にこもり、差別を助長しようとする自国の勢力に立ち向かうことを可能にする強靭な意志と柔軟な思考である。このプログラムの双方向性の意義がいよいよ試されることとなる。

# 2 サマープログラムの概要

**実施期間**

2016年9月9日（金）－ 9月23日（金）

**内　　容**

前半：本郷キャンパスでのプログラム（9月9日－9月15日）

- 江戸東京博物館、日光東照宮宝物館、國學院大学博物館、東京国立博物館、東洋文庫ミュージアム等、歴史系博物館・歴史文化遺産の見学
- 谷中・根津・千駄木地区での下町文化に関するグループワーク
- 山種美術館、サントリー美術館、国立新美術館、森美術館等、美術館の特別展、常設展等の観覧

後半：東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設（北海道北見市常呂町）でのプログラム（9月16日－9月23日）

- 擦文文化（11世紀頃）の竪穴住居跡　遺跡発掘体験（常呂町大島2遺跡）
- 常呂町および網走市周辺の遺跡、博物館の見学
- 世界遺産知床の見学および周辺の遺跡見学
- 勾玉製作体験・土器接合体験等、考古資料の製作・整理実習

**担当講師**

設樂 博己（人文社会系研究科　教　授）
松田　　陽（人文社会系研究科　准教授）
髙岸　　輝（人文社会系研究科　准教授）
熊木 俊朗（人文社会系研究科　准教授）
イローナ　バウシュ（人文社会系研究科　客員准教授）

**募集方法等**

2016年4月、人文社会系研究科ならびにセインズベリー日本藝術研究所のwebsite等により告知。選考後、5月中旬に通知。

**受　講　者**

本学の学部学生5名（前期課程学生1名、後期課程学生4名）、セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生4名

**支　援　者**
（プログラムに同行）

夏木 大吾（人文社会系研究科助教）
國木田 大（人文社会系研究科特任助教）
小田嶋輝明（人文社会系研究科事務部副事務長）
藤田　　司（人文社会系研究科事務部教務係長）
豊木麻紀子（人文社会系研究科事務部大学院係）
海老沢 樹（人文社会系研究科事務部教務係）
小山 誠司（人文社会系研究科特任専門職員）
舟木 太郎（人文社会系研究科修士課程大学院学生）
竹崎 宏基（人文社会系研究科修士課程大学院学生）
ペルシチ・マルコス（人文社会系研究科修士課程大学院学生）

**協　　力**

北見市教育委員会等

# 3 プログラム実施内容

## 東京の部

ガイダンス

プログラムの前半では東京に滞在しながら、日本の歴史文化遺産の全体像の把握に努めた。初日のガイダンスでは熊野純彦研究科長が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、本郷キャンパスでの座学、都内および近郊の博物館・美術館や史跡等への訪問実習を行いながら、日本の歴史文化遺産の多様な側面を学んだ。受講者たちは本郷キャンパス近くのホテルに泊まりながら課題をこなし、日本と海外との壁を超えるかたちで親交を深めた。プログラムの最終日には、各受講者がそれまでの活動をまとめたレポートを作成した。

UMUTオープンラボ

國學院大學博物館

### 本郷キャンパスでの座学と見学実習

設樂担当講師が日本の先史時代（旧石器、縄文、弥生、古墳時代）の考古学および土偶と埴輪の概要を１時間半ほどかけて説明した。続いて、同担当講師による解説の下、文学部考古列品室にある資料を１時間ほど掛けて丁寧に見て回り、座学で学んだ考古学の知見をモノの理解を通して強化することに努めた。受講者たちは、座学で学んだ考古遺物を、すぐに手にとって体感することができ、講義内容を深めることができた。

文学部考古列品室見学後は、東京大学総合研究博物館の所蔵する考古学などのコレクションを見学した。同博物館は、2016年５月に「UMUT オープンラボ」として展示がリニューアルされ、受講者は収蔵コレクションとともに、最先端の学術環境にもふれることができた。

### 博物館・美術館での実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であることを意識し、東京滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。訪問した館は、布文化と浮世絵の美術館（アミューズミュージアム）、江戸東京博

## 東京の部

物館、日光東照宮宝物館、東洋文庫ミュージアム、國學院大學博物館、山種美術館、東京国立博物館、サントリー美術館、国立新美術館、森美術館（訪問順）であり、髙岸担当講師、バウシュ担当講師、松田担当講師が分担しながら解説を行った。國學院大學博物館では、同館の内川隆志教授に案内して頂いた。期間限定の大型特別展を見る機会もあり、山種美術館では「浮世絵六代絵師の競演」展、サントリー美術館では「鈴木其一　江戸琳派の旗手」展、国立新美術館では「ダリ」展、森美術館では「宇宙と芸術」展を見学した。海外からの受講者にとっては、これらの博物館・美術館での見学実習は日本の歴史文化遺産と歴史全般を学ぶ良い機会ともなった。

東京国立博物館

### 歴史文化遺産サイト訪問

歴史を学ぶ上では、実際の地理的空間に結びつけながら考察を進めることが重要であるとの認識に基づき、東京滞在中には歴史文化遺産サイトも積極的に訪問した。訪問したのは、浅草、日光、六義園、上野公園である（訪問順）。浅草訪問は、浅草寺という今日の東京を代表する歴史文化遺産が、今日どのように社会的に受容され、また使用されているのかを直接体験しながら学ぶ機会となった。半日かけて行った日光訪問では、東照宮を見学するのみならず、陽明門および三仏堂の修復の状況を直接見ながら学んだ。また、オランダから寄贈された回転灯籠を前にして、バウシュ担当講師が江戸時代の日本とオランダの関係について解説した。上野公園では、松田担当講師が公園内の建築物、彫像や記念碑の説明を通して、日本文化の解説を行った。この他に、都内を代表する日本庭園である六義園を訪問し、見事な景観を体感しながら、庭園の文化について理解を深めた。

日光東照宮

上野公園

### 谷中・根津・千駄木でのグループワーク

本プログラムでは、本学学部学生とセインズベリー日本藝術研究所の協力により選抜された海外の学生との国際交流も目的となっている。東京大学に近い下町である谷中・根津・千駄木エリアを、受講者たちが中心となってグループワークを行った。本学学部学生と国外の学生とを合わせた２グループで、それぞれ訪問する歴史文化遺産などを自由に決め、東京下町の文化について主体的に学んだ。各グループは、根津神社、谷中霊園、森鷗外記念館などを訪問し、その歴史文化遺産の歴史や意義について学んだ。森鷗外記念館では、同氏の小説を知らない海外の受講者に、本学の受講者がレクチャーする場面もあり、英語で議論する良い機会となった。

根津神社千本鳥居

## 常呂の部

プログラムの後半では北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産を体験的に学んだ。常呂のプログラム中は施設に附属する学生宿舎に宿泊し、自炊もしながら課題に取り組み、受講者同士や参加スタッフ、そして地元北見市常呂町の支援者とも交流を深めた。プログラムの最後には各受講者がレポートを提出し、松田担当講師から修了証の授与が行われた。

講義

勾玉製作体験

土器の接合体験

トコロ貝塚遺跡

### 北海道の先史文化概説（講義）

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木担当講師が北海道の先史文化の概要について講義を行った。縄文時代以降、本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、続縄文文化やオホーツク文化、アイヌ文化の成立過程など、本州やロシア極東との交流関係に注目しながら順を追って紹介した。講義内容は専門性の高い内容であったが、わかり易い説明がなされ、受講者等からの質問によって講義内容を深めることができた。

### 勾玉の製作体験

縄文時代の勾玉を実際に製作してみる体験を通じて、古代の技術や造形に対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土したヒスイ製の勾玉で、実際の製作においては加工しやすい「滑石」を材料として約２時間かけて手作業で削って磨きをかけ､各受講者が１個ずつ勾玉を完成させた。製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても紹介した｡また、熊木担当講師から、講師自身が実際にヒスイを使って行った勾玉製作の体験談が語られ、簡単には削ることができないヒスイを加工していた縄文人の技術の高さを感じとることができた。

### 遺跡出土土器の接合体験

遺跡から出土した土器の破片を接合する作業の体験を通じて、考古学研究の方法について実践的に学んだ。遺跡出土の土器片について１点１点文様を観察して型式毎に分類し、ジグソーパズルを合わせる要領で破片同士の接合を試み、土器のかたちを復元する作業を行った。教材となる土器片については、北見市教育委員会から実物資料を借用した。この実習は、観察力と根気を必要とする難易度の高いものであるが、受講者達は集中して取り組み、いくつもの土器片を接合することができた。

### 実習施設周辺の遺跡見学

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史文化の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」の各地点（ところ遺跡の森地点､栄浦第二遺跡、トコロチャシ跡遺跡）とトコロ貝塚を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。ところ遺跡の森において

## 常呂の部

は、例年にはない「蚊」の大量発生に悩まされるなどのアクシデントもあったが、自然景観を含めてかたちで保全された歴史遺産のあり方を体感することができた。

### 遺跡発掘体験

常呂町内に存在する「大島２遺跡」において遺跡の発掘を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。大島２遺跡は擦文文化期（11 世紀頃）の竪穴住居跡が窪みで残る集落遺跡で、発掘はその窪みのうちの１軒を対象として、午前 10 時頃から昼食をはさみ午後３時頃まで実施した。熊木担当講師および夏木助教指導のもと、受講者は移植ゴテで竪穴の埋土を丁寧に掘り下げ、炭化材や石器などを検出した。発掘調査に初めて参加する受講者も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。

### 博物館見学

実習施設の近隣に位置する各博物館、すなわち、ところ遺跡の館、常呂町郷土資料館（以上北見市常呂町内）、北海道立北方民族博物館、網走市郷土博物館、博物館網走監獄、モヨロ貝塚館（以上網走市内）を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は展示資料を実見しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。

### 世界遺産　知床見学

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理のあり方についても学んだ。斜里町ウトロまでの行程を含む約３時間の移動は全て車で行い、ウトロチャシコツ岬上遺跡、知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝、オンネベツ川孵化場といった主要地点を巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。登りのきつい断崖の上にあるウトロチャシコツ岬上遺跡では、知床博物館の松田学芸員から、発掘中の現場において詳細な説明をいただいた。

### 考古学と現代社会（講義）

プログラム全体の総括を兼ねて、バウシュ担当講師が“The perception of Jomon culture in the modern world”と題した講義を行った。縄文文化に対する認知が現代に生きる個人の価値観や美意識に対してどのような影響を与えるのか、また地域社会のアイデンティティ形成に対していかに寄与するのかについて具体的な事例が紹介され、受講者は現代社会における歴史遺産の価値や存在意義について学んだ。

発掘体験

モヨロ貝塚館

ウトロチャシコツ岬上遺跡

最終講義

## 東京の部

## 常呂の部

Tumi Grendel Markan; Sabrina Fantuzzi; Frances Iddon; Dessislava Veltcheva

## Tokyo part

### Day 1 – 9th September

The first day of the program began for us just after lunchtime in a building on the University of Tokyo (Todai) Hongo campus belonging to the Faculty of Letters. As it was our first chance to meet the other participants in the program, we each took it in turn to introduce ourselves, what we studied and our interests. After this brief introduction to the course, we were taken by Taro Funaki - a Masters student at Todai - and Dr. Dai Kunikita – an Affiliate Assistant Professor at Todai - to the hotel which would be our home in Tokyo. At about 4pm and following a quick rest, we were given Tokyo metro cards (Pasmo) and led to Asakusa. Our first stop was the Senso-ji. We were first given a potted history of this 1500 year Buddhist shrine complex, the oldest in Tokyo, in the shadow of the Kaminarimon gate, an elaborate edifice flanked by imposing statues of Fujin and Raijin, the gods of wind and thunder. After first purifying ourselves in incense smoke, we entered the main temple and spent almost an hour wandering around the various shrines and structures that make up this stunning center of worship.

To wrap up this first day, we visited the Amuse Museum which looks out over the Senso-ji. While this museum features exhibitions about all aspects of Japanese textile culture, we were there mainly to see one specific exhibit on 'Boro' - the garments of late 19th century Japanese fieldworkers from northern Honshu. This exhibit drew attention to how, despite their meagre lifestyles and relative poverty, these everyday people were still able to make aesthetically-pleasing, though functional, clothing. Once we had whizzed through the permanent collections of the museum, a highlight of which were some spectacular replicas of Jomon clothing, including some items that we were allowed to try on, we headed back to the hotel. The day was rounded off with a spectacularly good buffet-style dinner in the hotel restaurant. This began the series of amazing meals that would make great food one of the most memorable parts of an entirely spectacular program!

**Facts:**

- Many Buddhist temples in Japan have a small Shinto shrine attached to them and vice versa, which shows how much the two are tolerant of each other and how they are intertwined.
- Still in the beginning of the 20th century, people in rural regions of Aomori Prefecture would be wearing self-made clothing made of patchwork scraps of fabric.

### Day 2 – 10th September

**Diary:**

Today was a very intensive museum day.

We first went to Todai to listen to an overview lecture in English by Dr. Shitara about the Jomon, Yayoi and Kofun periods and a more in-depth one about Dogu and Haniwa. I especially liked his summaries about life, ritual and diet of each period. After this, he gave us another short lecture in Japanese about earthenware figurines, Dogu from the Jomon period and Haniwa from the Kofun Period. It was very interesting to see the similarities and differences. So while the Jomon Dogu were seemingly more of a ritualistic object and often in what we perceive as female form, Haniwa were very clearly used in a mortuary concept and strategically placed on a burial mound. There were lots of different shapes of Haniwa for different purposes, such as warrior, horse, house, shield.

After the lecture, we were given a tour of the University prehistory collection which is not open to the public and houses many extraordinary pieces. I was especially impressed by the Haniwa horse on display and the bronze mirrors from China which were embossed with the four cardinal directions associated with different animals and colors! Apparently they were used in shamanistic activities.

As the last part of the morning program, we visited the official University Museum. The concept of that museum is the "open lab" where you can watch scientists working. It was a great opportunity to see how work is done in a lab and what implements the scientists and researchers use. The AMS was especially impressive.

After a lunch of Tuna on Rice we headed over to the Edo-Tokyo museum which showcases the various stages of how the modern city of Tokyo was formed, from its beginnings when the Tokugawa family moved their residence there to the big

earthquake of 1923 and beyond. The museum was very hands-on and you could try various interactive displays, such as lifting a basket of fish and carrying a fire brigade's standard. The whole exhibition was very well executed both in terms of variation, information density and display. However, I found the amount of graphs, which were only presented in Japanese, a bit too extensive, as they did not contribute too much to the overall experience in the museum.

The highlight was definitely the performance by a kyokugei artist. She presented traditional balancing acts such as balancing various everyday tools (rice bowls, balls and tea bowls) on her chin and rotating a paper umbrella with various objects spinning on top. The performance was very energetic and fun and was definitely the most cherished memory of the museum. It was so colorful and full of energy!

**Facts:**

- Late Jomon people used to do tooth ablation and remove teeth according to different patterns. Only the front or canine teeth would be extracted however, as nobody would have seen it if they had extracted the molars.
- The first depiction of sumo can be found on drawings from North Korea!
- The original Nihonbashi bridge, made of wood, was 51m long.

## ▶Day 3 – 11th September

**Diary:**

After boarding the train to Nikko, a town north of Tokyo, the third day of the program started at the Toshogu shrine, the burial place of Tokugawa Ieyasu built for him by his grandson Iemitsu. We made a gradual ascent up the hill toward the shrine, mingling with the swarm of other tourists and worshippers, before passing through a grand Torii gate and into the courtyard. It featured a carving of the three wise monkeys and the famous sleeping cat; a sacred horse gifted from New Zealand; and a staggeringly tall pagoda among other buildings and structures. We then climbed up to the resting place of Ieyasu and circled the bronze structure that marks the location of the tomb.

After the exploration of the remaining parts of the shrine under reconstruction we made our way over to the museum devoted to Ieyasu's personal belongings and shrine treasures. It included items such as Ieyasu's favourite rock; the tools and toolbox of Koura Munehiro - his favourite carpenter; the hair and beauty products for his spirit, which must be replaced every 50 years to keep them in good condition; and the palanquin used to carry the godly manifestation of Ieyasu in the annual ceremony that takes place at the shrine. It was a varied and interesting collection which ranged from grand and ostentatious to small and seemingly mundane, yet equally precious, items relating to the powerful shogun.

**Facts:**

- The Nikko Toshogu Shrine was erected by Tokugawa Ieyasu's grandson Iemitsu, in order to show how powerful his grandfather was (but even more to show his own).
- After 1616, Christianity became outlawed in Japan, and the Portuguese and Spanish were kicked out of the country.
- Shaved Ice with syrup tastes the best when you mix all the flavours together!

## ▶Day 4 – 12th September

**Diary:**

Day 4 was a day where we got the chance to walk around the Yanaka, Nezu and Sendagi areas of Tokyo. We got off at Nippori station and divided into two groups. We got a chance to visit Kyou-Ouji temple which had a bullet marks left on the entrance door which occurred as part of the Boshin War. The soldiers who were from Bakufu were protected inside the temple. Then we got a chance to see the Yanaka Ginza shopping complex. It had many small shops, including one which sold Taiyaki, the traditional fish-shaped pancake filled with sweet bean paste. It was interesting to see that many shops have continued to incorporate traditional Edo period styles such as 'Enshumen Tsumugi' and 'Harico', which was a doll present which was given on the birth of a new child. It was very astonishing to see how much the Edo period has impacted current society and how it has been valued over time. We also got to see the beautiful Nezu Shrine where we were taught that shrines and temples have different ways of praying. We also got to see the three famous monkeys again. Group A also visited a museum devoted to the famous surgeon and author Mori Oogai. His biography was very impressive! In the afternoon we visited the Rikugien where we could relax and walk around the beautiful Japanese garden. We

ended the day in 'Toyo Bunko', the so-called Oriental Library. This was one of our favorite museums! This library was comprised books in 80 languages and most of them were antiques or primary sources. They had engaging elements such as small theaters, and even from time to time they had small introductions on the different exhibits, where they explained the objects more in detail, which was very engaging. There was also a special section about ukiyo-e woodblock prints called 'Shunga' where only people aged 18 and above were allowed to go in. This section featured erotic woodblock prints, which was a very rare sight to see in Japan, where shunga doesn't have the high reputation it currently enjoys in western countries.

**Facts:**

- Mori Oogai entered university at age 11. In his life he was a doctor, writer, soldier, top of the National Museum and was also a translator!
- The 3 monkeys 'See no evil, hear no evil, speak no evil' had a meaning behind that if you live a humble life the god will give you fortune.
- The famous saying 'Tamaya' 'Kagiya' were the names of the pyrotechnician in Edo period.
- Recently, "old-fashioned" quarters such as Yanaka and Sendagi have become more popular and attract many crafty people.
- Rikugien garden was fashioned and built after Buddhist principles.

### ▶ Day 5 – 13th September

**Diary:**

Today started with an early-morning visit to Kokugakuin University's archaeological museum in Shibuya, where it exhibits a portion of its 100,000 item-strong collections archive. While it did include some spectacular finds from its almost 130 years of antiquarian collecting and archaeological excavation, what was perhaps even more fascinating was the fact that, due to the archaeology department's long history of training Shinto priests, it also has an extensive collection of Shinto ritual artefacts. Of these, some can be seen nowhere else! Among the religious displays we saw was an example of the types of lavish feasts created for festival days which are catered towards specific gods. As well as this, there was a one-of-a-kind recreation of the temple at Ise where the 'Yata no Kagami', the mirror that forms part of the holy trinity of objects that make up the Imperial Regalia of Japan, is kept. After being led through the Shinto section of this museum and then exploring the archaeological segment, which features some fantastic examples of Kofun-era Haniwa clay figures and a huge copy of the King Gwanggaeto stele, which tells of how the Korean kingdom of Silla defeated the Japanese Wa in the fifth century CE, we left for lunch and the next museum.

Once we had had a quick meal in the university canteen, we headed to the Yamatane Museum of Art. While not originally the plan, the rain had scuppered any ideas of visiting a nearby Kofun. However, this turned out to actually be quite a good thing. As it happened, when we visited the Yamatane, there was an exhibition of original Edo-period woodblock prints, including some original pieces by Hokusai and Hiroshige, including many of the former's series of *Views of Mount Fuji*. As well as these world-famous painters, there were also some fascinating works by some less internationally known print-makers such as Utamaro, who made the Edo equivalent of women's fashion magazines.

After this incredible exhibition of famous works, we decided to end our day with a spot of sightseeing by quickly visiting Shibuya station, from which we finally had the chance to see the famous Shibuya crossing - a view that truly lived up to its reputation!

**Facts:**

- Shinto objects in the museum could not be photographed because of religious reasons (maybe the spirits inhabiting the objects wouldn't like it?).
- Hiroshige created many variations of his 53 stations of Tokaido! There is not only one set, but he made many more over a period of a few years, like different editions of the same topic.
- The big mural in Shibuya Station Mark City is by Okamoto Taro and depicts the horrors of the atomic bomb over Hiroshima.

## ▶Day 6 – 14th September

**Diary:**

Today we spent the morning walking around our "Homebase" of Ueno.

Previously I had never really paid much attention to Ueno Park, but Dr. Matsuda pointed it out to us as an example of bad park heritage presentation. Indeed there were a few very interesting sites in itself such as a burial mound and various statues and monuments of important people during the Meiji Restoration. I was particularly impressed by the "Full-Moon-Pine" at the small temple modelled after Kyoto' s Kiyomizudera overlooking the Lotus pond of Shinobazuike. All these monuments become interesting and important if you do know about them and their history, so I was feeling a bit guilty about not having been mindful about them before.

After this very informative walk, we went over to the National Museum, where we spent a good 2.5 hours visiting the Main Gallery, the Gallery of East Asian Art, and the Archaeology Department. We started out with the Archaeology exhibition which had (not surprisingly) a fantastic selection of finds from the Jomon, Yayoi and Kofun periods as well as early Buddhist things. There were even a few stations where you could for example ring a replica of a dotaku bell or see hands-on how big and heavy early golden coins were.

We unfortunately didn' t have an enormous amount of time to check the Main Gallery, so we had to run through it a bit in order to see all the rooms we wanted to, but I was very pleasantly surprised to recognize quite a few items, including National Treasures, in the showcases that I had already encountered during Art History lessons!

Finally we visited the Asian Gallery. While it hosted impressive objects such as a 22nd Dynasty mummy from Egypt and carved precious stone pomegranates from China, the modern layout of the building itself was frustrating as not all the escalators and stairs connected to all floors. This made the navigation of the building and the different exhibitions a bit painful.

After lunch in the cafeteria of the Tokyo University of Arts we had the option to see a Kabuki show, which is a traditional Japanese play. Kabuki usually takes about 6 hours but we were able to watch only one part which took about 2 hours. The Japanese used in Kabuki is very traditional and almost all the Japanese students were using a audio guide to explain the story. We saw a story called 'Yoshino-Gawa' which was a love story between two individual who lived across a Yoshino-Gawa (Yoshino River which had a width of 100m). All the performers in Kabuki are male but it was impressive to see how beautifully they were depicting female.

**Facts:**

- Parks need proper management in order to make them appealing to the public and tourism. People don' t just show up if there is something to see!
- The national Museum' s Asian Gallery hosts a huge amount of objects that had been brought to Japan during Japan' s expansionist time.

## ▶Day 7 – 15th September

**Diary:**

We started today at the Suntory Art Museum, where we were able to witness the fantastic *Suzuki Kiitsu: Standard-bearer of the Edo Rimpa School* exhibition. Sakai Hoitsu revived the Rimpa style of painting in the Edo period to develop it into what was called 'Edo Rimpa' . Kiitsu was his most prominent pupil and master of this style. We walked around the gallery appreciating his and his followers works each displayed in a rather minimalist way against black walls. This contrasted with the vivid coloring, bold compositions, and opulent designs of the works. The works included bird-and-flower paintings, landscape paintings, narrative paintings, genre paintings, Buddhist paintings, and seasonal festival paintings, as well as working hanging scrolls of painted mountings, fans, kites, battledores, and votive wooden tablets. The highlight of the exhibition however was Kiitsu' s *Morning Glories* the six panel folding screen featuring the eponymously named flowers painted in startling vivid blue ink on gold leaf.

The second exhibition we visited was focused on Salvador Dali at the National Art Center Tokyo. He was from Catalonia and was one of the most influential 20th century artists and spearheaded the surrealist aesthetic. This was a very interesting exhibition as it showed the progression of Dali' s creative style. His early works are almost unrecognisable as

his; they show a varied range of experimentation with fauvism, pointillism and other styles. It also features his work on stage sets and costume designs for ballets such as Bacchanal and his film collaborations with Alfred Hitchcock and Walt Disney. It was interesting to see his wide range of interests and the diversity of his talent. One of the exhibition highlights was *Average French Bread with Two Eggs on the Plate without the Plate on Horseback Attempting to Sodomize a Crumb of Portuguese Bread*, which contrasted his undeniable painterly skill with his undeniable humour and eccentric nature.

The last stop of the day was the Mori Art Museum and the *Universe and Art* exhibition. This exhibition explored the universe and the cosmos as a point of unfailing human interest and obsession throughout history, spawning countless artworks and stories. It featured objects from throughout history and from all over the globe, even including contemporary works from art teams such as semiconductor. Highlights from the exhibition included the Sexy Robot from illustrator Sorayama Hajime and Rookie, the morphing of a baby and a caterpillar, from Patricia Piccinini. These items were bizarre and thought provoking and were very engaging as museum pieces. However the link between the exhibition pieces was very vague and they seemed all simply to be somehow related to space. It also did not fulfil its promise to explore astrobiology or any cosmological themes in detail.

**Facts:**

- From Mori Art Museum Sky Platform it is possible to see all of Tokyo!
- Salvador Dali is a way more many-faceted artist than originally thought by most people who only know him for his surrealist works!
- Suzuki Kiitsu is not very well known in the Western world, which is very sad, as his works are fantastic and sometimes extremely realistic.

## Hokkaido part

### ▶Day 8 – 16th September

**Diary:**

The day has come to fly to Hokkaido!

After 1 hour and 40 minutes we arrived to the Memanbetsu Airport. The scenery outside was exquisite. The air was very fresh and the blue sky was very large, making it a complete opposite experience from the Haneda Airport from which we departed. As we arrived at the airport, Dr. Kumaki and Dr. Natsuki welcomed us warmly and gave us a short introduction to the plans in Hokkaido. As we arrived in Tokoro, the girls were allocated on the second floor and the boys to the first floor of the students lodge in the site. For our first day we cooked Genghis Khan, which translates as Japanese lamb barbecue. This dish uses lamb meat and we cooked it on the hot plate. Some of the locals came to welcome us as well and they brought us sashimi (sliced raw fish) and fresh grapes which were very delicious. It was also very interesting to hear from everybody in the group that they were able to sleep much better in Hokkaido! Being part of nature and having to cook for ourselves has made us much closer!

**Facts:**

- Hokkaido people are very friendly and the local food is delicious :)
- Memanbetsu Airport was hung with posters saying WELCOME! and FIGHT!
- The local Abashiri Brewery has green and blue beer.

### ▶Day 9 – 17th September

**Diary:**

Our first day at the Tokoro archaeological field station in Hokkaido proved to be an extremely busy one. Beginning at 9.30am, we were given a background lecture on the pre-history of Hokkaido by Kumaki-sensei, the main site director for the University of Tokyo's excavations in Hokkaido. This intensive primer managed to pack 22,000 years of human existence in northern Japan into just over an hour. Despite its brevity, we came away from it with a surprisingly deep

understanding of the interplay between the main regions in Asia and how immigration affected habitation in Hokkaido. For example, we saw how, while originally it was just the Jomon people who lived there, subsequent movements of groups from northern Honshu and southern Siberia gave rise to distinct cultures such as the Satsumon, the Okhotsk and the hybrid Tobinitai tradition.

As a follow up to this lecture, we went to the first of three buildings that display local archaeology in the Tokoro Archaeological Park to see the very objects about which we had just learned. While small, the Tokoro Archaeology Museum managed to permanently display objects for each of the periods that we had been told about and even held a small room for special exhibitions. Interestingly, at the time of our visit, this room was showing a very well-curated exhibit on Palaeolithic microblades put together by Todai undergraduates – a very rare sight.

In view of the fact that pottery makes up such a huge part of Japanese archaeology, even being used to name the various pre-historic cultures of Japan, we were given the opportunity to try refitting original Jomon and Epi-Jomon pottery. As can be expected from original materials, it was only possible to refit small portions of pots from the material from Kitami City Board of Education. Even in spite of this, it was still incredibly satisfying when, piece by piece, the original shape of an ancient piece of ceramic began to emerge.

Our day ended with visits to two other museums in the area. The second, the Tokoro Buried Cultural Property Center, covered much of the same information as we had seen earlier, although in a more family-friendly and publicly-engaging manner, with the exhibits centered on a video-hall styled on the insides of a Jomon pit-dwelling. However, it was the museum that we visited before this at 3pm that really proved to be the highlight of the day. The Tokoro Folk-Culture Museum is a true hidden gem. Housed in a former elementary school building, this museum is truly a cabinet of curiosities. Every room, shelf and square-foot of floor space is packed with objects from the last century donated by locals. Everywhere we looked, there was some new item, whether it be an ancient foot-pumped pipe organ or a mochi-making hammer, that gave some new and unexpected insight into the past lives of people in the area. Being allowed to just explore made every new discovery a more deeply personal and exciting way of engaging with these incredibly human everyday objects.

**Facts:**

- Due to the isolation of Hokkaido, influences from Honshu did not have so much im-pact and that helped the development of regional pottery and cultural styles influ-enced from Sakhalin such as the Satsumon and Okhotsk traditions that are not wide-ly known in the rest of Japan
- Compared to European early 20th century farming devices, the Japanese ones looked very different!
- Mosquitoes in Hokkaido do not even bother about insect repellent and are extremely sneaky, like Ninjas!

## ▶Day 10 – 18th September

**Diary:**

Today we made Magatama "comma shaped" beads. These had been made both in Japan and Korea in prehistoric times. The ones usually found in graves are made of jade which has a hardness of about 6.5, but since it takes a lot of time to polish the stone, we were given pieces of soapstone (hardness 1) and different types of sandpaper. We were given instructions and pictures of different shapes of Magatama to get inspired and got to work. It was very interesting to see that even after 2.5h of working on the stones, our beads weren' t completely finished! Imagine how much more time people in prehistoric times must have taken in order to make a bead of jade!

After lunch we got a tour by Kumaki-sensei of various sites of interest surrounding Tokoro, which were unluckily spoiled by the humongous amount of mosquitoes that were following us no matter how much mosquito repellent we used! Most of us missed at least a bit of the information told because we were constantly slapping ourselves and each other in a vain attempt to ward off mosquitoes! Kumaki-sensei showed us reconstructions of Jomon, Epi-Jomon and Satsumon dwellings in the Tokoro Iseki no mori and then took us to a 17th century Ainu "chashi" fort and the Tokoro shell midden. Although it was very impressive in size, apparently the Tokoro midden is small compared to the middens found in the mainland Japan...

Finally we went to Wakka Flower Park situated on the border of the Saroma Lake. The amount of wild roses and rosehip

was fantastic and we got to walk around the beach that had black volcanic sand, which was very special!

**Facts:**

- Jade has a similar hardness to iron and it must have taken Jomon craftsmen and women a few months of work to complete a single bead!
- The biggest shell middens of Japan can be found in the Kanto region near Tokyo.
- Reconstructed Jomon and Epi-Jomon dwellings have to be rebuilt every 10 years, because decay happens very quickly on the natural materials used.

### ▶Day 11 – 19th September

**Diary:**

On this day we got our first chance to do some practical archaeological fieldwork on the Oshima 2 excavation site. Pit dwelling number 5 is where we started, after pulling on our work gloves and hats and applying a heavy layer of mosquito spray. We split ourselves into four groups and began digging 10-15cm down in each quadrant which was divided through by a cross shaped soil bank. After we cleared some of the earth out and cut down some of the more stubborn roots we moved onto using our trowels to scrape away the next layer of earth. We were in search of the floor of the pit dwelling and the lighter layer of soil. During this process we found a few pieces of carbonized wood, a piece of Satsumon pottery and most excitingly sections of the original stove. This helped us orient the house and imbued everyone with some archaeological excitement and passion.

In the evening we made our way down the road towards the local hotel which had an onsen hot spring attached. It was an amazing experience with huge baths heated from the hot springs, a steam room, cool baths and the outdoor Rotenburo. We sat soaking in the steaming water while perched on natural rocks overlooking the sea and the nature all around us. It was the perfect way to end our day and relax our sore muscles from the excavation.

**Facts:**

- Japanese excavations use different tools from European ones. While in Europe, masonry trowels are used, in all the excavation sites we visited in Japan, gardening trowels were prominent. Also, in Japan a sort of oversized plastic dustpan called “MI” is used for transporting soil to wheelbarrows.
- Onsen is a perfect way of relaxing after a hard day excavating. Pity that it can only be found in Japan…

### ▶Day 12 – 20th September

**Diary:**

Day 12 was a very busy day! Some of the students won a special “prize” in a draw, which allowed them to get a salmon fishing experience! At 7.30am we - the winning students -got into a pair of rubber boots and our teachers escorted us to the Tokoro harbour, where Mr. Nagata the fisherman already waited for us. We were given a place on a crate on the fishing boat and set off into a beautiful morning. When we reached the nets that had been placed in the water the night before, the real action started. Mr. Nagata and his assistant started pulling in the net, and suddenly the boat was full of thrashing salmon! The energy and power the fish exhibited when jumping was absolutely astounding. It didn’t take long for them to make the whole boat rock and the floor slippery with sea water. After collecting all the nets, we set off with full speed back to the harbour, where we, drenched up to our hips, were gifted one male and one female freshly caught salmon for dinner by Mr. Nagata. Great experience!

The day in Shiretoko was very packed! We started off by visiting the Koshimizu Gensei-kaen or the world flower preserve, where we found a train that only runs 5 times a day! We were hoping to see the train but it was later than the scheduled time so we were not able to see it.

Half an hour drive further, we had the privilege to visit the Chashikotsu-misakiue Site where an excavation conducted by Shari town was currently ongoing. We had to walk up a steep hill in order to reach the excavation site. The aim currently was to see how the spaces between the pit-dwellings had been used, and they were finding many sea mammal and even some bear bones. The Okhotsk culture buried their dead with their legs bent and they placed an upturned pot on top of their head. The Okhotsk tomb that was found had been surrounded by many large stones. These stones had to have been

carried all the way uphill, which is incredible. Also, since there was no freshwater spring on the top of the mountain we were all very amazed to hear that the people had to carry water up the hill every day!

Then we visited the Shiretoko Pass and saw its astonishing panorama of mountains and seashore. We also had the chance to visit the five Shiretoko Goko Lakes. Due to time pressure, we were only able to see one lake but there were many signs saying that bears were seen recently.

Oshinkoshin waterfall was the last stop. Usually the waterfall has two streams, but due to the four typhoons that had hit Hokkaido in the last months the amount of water had increased dramatically, making it into one stream. Shiretoko was very beautiful and we were all very happy to have seen the World Heritage site.

**Facts:**

- Salmon can only be caught from mid-September to mid-November when it is the season when they travel upstream to mate and lay their eggs at the river sources.
- Shiretoko was registered as a World Natural Heritage site in 2005 and is being de-veloped for nature loving tourists more and more.
- When hiking in Shiretoko (and basically all of Hokkaido) you should wear a bear bell on your backpack which will make the bears aware of your coming. Creeping up on a bear silently is very dangerous, as they scare easily and will attack when they feel threatened!

## ▶Day 13 – 21st September

**Diary:**

In the morning, still tired from the early start of the day before, and after a quick breakfast, we all piled into the minivans to make the hour-long drive to the nearby fishing city of Abashiri. Our first stop when we arrived was the Hokkaido Museum of Northern Peoples. This fascinating museum was quite unlike any museum that possibly any of us had ever seen and was easily the best one we went to in Hokkaido. The museum' s aim is to educate the public on the history and culture of various indigenous groups from the northern hemisphere. Combining ethnographic objects and media, archaeological artefacts and reconstructions, it provided information about all manner of cultures. These ranged from the more well known, such as the Inuit of Canada and Greenland, to the less known, for example the Koryak of Southern Kamchatka. Virtually every aspect of daily life was represented in some way, with displays giving us an idea of what they wore to adapt to the harsh northern cold; what their houses looked like, including full-scale reconstructions; and even what their various languages sounded like. The icing on the cake was the numerous interactive elements, including traditionally-made Ainu stringed instruments called 'Tonkori' , and a very well-made English-language audio-guide.

From here, we proceeded to quite a different kind of museum. While the Northern People' s museum was very modern and up to date with modern ethical issues, the second museum, the 'Abashiri Local Museum' , was incredibly old fashioned in every sense of the word. Residing in an ivy-blanketed building, built in 1936 by Yoshiya Tanoue, one of the small handful of modernist architects in Japan, this museum is very much a throwback to early curatorial styles and sensibilities. The ground floor was taken up by a maze of rooms, each filled with a menagerie of taxidermied creatures and articulated animal skeletons, arrayed in various life-imitating poses. Despite the slightly morbid nature of these displays, it was none-the-less fascinating to see the huge size of many of the fearsome creatures hunted by the early inhabitants of Hokkaido in the proverbial flesh. The second floor was rather more informative and relevant to what we had been learning about so far. It was, largely, split into two sections. The first covered the prehistory of Hokkaido, representing the Jomon period until the Okhotsk mostly using archaeological pottery finds. The second part however made quite a nice follow-up to the first museum of the day. This section involved itself with Ainu ethnography and was packed with cabinets displaying every-day early-modern Ainu tools and cultural materials, from imported Edo-period swords, to ice skates. It even featured a map of Hokkaido with all of the Ainu place-names translated into modern Japanese!

Next on the agenda was the Abashiri Prison Museum. The original 19th century Abashiri prison building, closed down in 1984, was completely uprooted and reconstructed carefully in its current location where it now serves as a museum. Before entering the museum proper, we went to the canteen to have lunch, which turned out to comprise a prison meal of pickled vegetables, barley, rice and whole mackerel. After this simple meal, we toured the various structures, learning about how

the prison was able to be self-sufficient; how the guards lived and earned advancement; and how the prisoners' grueling and often deadly toil in 1890 to build the Abashiri-Asagawa road transformed Hokkaido and helped to tame the expansive wilderness.

Our final museum of the day was the Moyoro Shell Mound museum. This famous center of prehistoric habitation, which has been a nationally designated historical site since 1936, was the first major Okhotsk site to be discovered and led to numerous further excavations that confirmed the existence of this early immigrant society. Probably the best thing about this museum was that all of the original pit dwellings and tombs have been kept in place and partially reconstructed so that we could see how everything had stood in relation to each other in the past.

While all of us had different opinions on the various museums we had visited on the day, the one thing we could all agree on was that we could definitely have done with an extra hour or two in some of them, especially the Prison Museum and the Northern People' s Museum. These two museum' s physical size and breadth of information provided meant that, even in the hour and a half we had for each, we were able to see barely even half of what was on display!

**Facts:**

- The 5-fingered cell block in Abashiri prison had been modeled on European (Dutch and English) prisons and had been in use from the early 20th century until the year 1985!
- It is surprising how many cultural groups make a living in what we would call inhospitable regions of the world, and how crafty and inventive they have to be in order to survive the harsh climate!

## ▶DAY 14 – 22nd September

Today was the last day of the program before heading back to Tokyo.

In the morning, we were given an interesting and engaging lecture by Dr. Ilona Bausch of the University of Tokyo. She told us about the current "trend" in Japan of Jomon things being "hip" and the rising movement and the desire of people to go back to the old times, when people still were in harmony with themselves and nature.

Surprisingly and in contrast to Europe, interest in archaeology in Japan as a marker of local and national identity seems to reach far wider into society and includes a lot of local festivals and workshops about pottery, crafts and even on how to hunt and kill animals and butcher them in a sustainable way!

The rest of the day was spent with finishing our reports and in great anticipation of the farewell dinner the teachers were already preparing in the kitchen!

## ■Theme 1: How different museums display their content, for example how viewer interaction is integrated within the exhibits

There was a great difference in the quality of the museums we visited. In order to explain this, we decided to focus on a few topics such as availability of multilingual information, what audiences they catered to, and how interactive they were.
In terms of English information and appeal to international tourists, there were both very good and very bad examples. Generally speaking, the museums in Tokyo were all at least in the "ok" section. Most museums provided at least an overview in English plus English labels for the displayed objects. Some foreigner-friendly big museums that catered to locals and international tourists alike such as Edo-Tokyo and the Mori Art Museum had very good (and correct) English descriptions that made navigation easy. Surprisingly however, the Tokyo National Museum, being such a famous and well-visited place, could have been more thorough with its English information!
In Hokkaido, being a way more rural setting with far less international visitation, it is no wonder the English explanations were mostly very minimal or even non-existent in most museums. Some, such as the Abashiri Prison Museum, at least had short overview pamphlets in English, Chinese and Korean available, which was ok, but still very basic. There was however a superb exception to this, being the Abashiri Museum of Northern Peoples. Their English guide was very well made, extensive in its information and easily understandable, and made this museum an instant favourite for all of the international students!
In terms of information and interactiveness the museums here, as in Tokyo, were generally more "advanced" so to say. Both in some of the art museums and the history ones, there were interactive displays, things to touch and explore and engage the audience. In this regard, Edo-Tokyo Museum, Abashiri Prison Museum and Abashiri Museum of Northern People were all great. We could dress up in Ainu costumes, try lifting baskets filled with stones, and listen and watch various videos on different topics. Most museums however, including most of the art galleries excluding Mori Art Museum, were very toned-down and classic in term of their presentations; most things behind glass could not be touched, and very often photography was forbidden (perhaps for copyright reasons), and there were not many interactive stations which made visits a bit tiring after a while.
We visited a variety of museums in Tokyo. These covered a multitude of different topics and periods, from the Edo-Tokyo museum; to the Tokyo National Museum; to the Salavador Dali exhibition at the National Art Center. There was a huge amount of Japanese art, archaeology and heritage, but also exhibitions from other Asian countries and even from European countries. The availability of information on international and global objects and histories was quite wide. However in Hokkaido there was a lot more of a focus on local history. Museums such as the Abashiri Local Museum, the Abashiri Prison Museum and the Moyoro Shell Mound museum explored only either local history or local area connections to prehistory. However in Hokkaido there was a much heavier focus on the indigenous populace and their origins, traditions and culture. The Hokkaido Museum of Northern Peoples was fascinating, and really worked hard to tell the stories of prehistory as well as the Ainu and their importance to Japan.

## ■Theme 2: Differences between modern Tokyo and rural Hokkaido

Our second theme is the difference between Tokyo and Hokkaido where we spent week one and two of the program respectively. Tokyo was a bustling metropolitan center; constantly thriving with people, movement and action. We spent the days exploring huge national museums, prestigious art galleries and grand temples and travelling by the hugely efficient subway system. Our evenings were spent exploring the streets, shops and attractions that the nightlife in such a huge city had to offer. In contrast Hokkaido, and more specifically Tokoro, was far more of a rural countryside setting. We were surrounded by beautiful landscapes and clear skies and had an opportunity to see far more of the natural tourist spots in Japan such as the Shiretoko World Heritage site, the Oshinkoshin waterfall and the red marsh samphire. We travelled mainly by car due to the huge expanse of land in Hokkaido and the lack of convenient public transportation systems. In the evenings we rarely went out into the town due to this and would spend our time cooking dinner together

and gathering together to talk, laugh and play games.

A second big difference between our two destinations was the interaction and connection with others. In Hokkaido we were able to meet the local people and even go on a boat trip with a local fisherman. They taught us about Tokoro's sustainability and this was reflected in their generosity as they gifted us fresh ingredients such as salmon and various vegetables including potatoes, pumpkin and onions to cook with. Cooking our meals together and sharing food with these people really helped us to see and feel the sense of community in Hokkaido. However in Tokyo it was far more impersonal. We did not meet or have dinner with many local people and there was no access to fresh local ingredients. Tokyo came across as being quite a hectic lifestyle with less of a connection between the millions of anonymous people who live there. We did not have a chance to cook or wash up together either and so that connection and team spirit we formed in week two was missing.

The next big difference was the representation of the two places to visitors. Tokyo was far more multicultural and open to international visitors. Most of the street signs, subway stops and museum labels all had an English translation, with Chinese and Korean often included as well. This made it easier for some of the international students to navigate and to take an active part in the program. In Hokkaido there was less of a drive to internationalise the area. Most of the museums and attractions were catered towards Japanese visitors and few included any translation. The audio guides available were also often very basic and just described the items with no further context. This is perhaps explained by the fact that big cities tend to be a bigger draw for international visitors and so more of an effort is made to make cities like Tokyo tourist destinations. The museums in Tokyo also were generally all of a very high quality with globally important art and archaeology exhibitions whereas the museums in Hokkaido were more of a mixed quality, probably due to less funding and tourism. However the museums in Hokkaido had more exhibitions and information about the indigenous people of Japan, the Ainu, as Hokkaido is where they live. In conclusion, Tokyo was a far busier and a more thriving cultural center with high quality museums and attractions. Hokkaido hosted an open beautiful landscape filled with kind and welcoming people but had less of an international impact and was more of an isolated community.

## ■Theme 3: How religiosity is integrated into museums and how the public acts in religious spaces

During our time as visitors in Tokyo and Hokkaido we visited many temples, shrines and reconstructions of religious ceremonies and were able to witness the religious and sacred nature of certain parts of Japanese culture. On day five we visited Kokugakuin University museum where we learnt about the three pieces of the "imperial regalia" – the sword, the mirror and the gem which were all kept sealed in boxes that even the Emperor cannot look inside. This was further reflected in the ceremony of rebuilding the cedarwood house shrine of Ise, where the mirror is kept, every twenty years. These items are so sacred that even the most important religious figures cannot see them; this highlighted the ongoing importance of such religious items in Japanese culture. This is also highlighted in our day four trip to the Daikokuten Temple in the Yanaka area, a 17th century temple that has the remains of bullet holes from the Boshin war. This shows that the continued use of sacred buildings and the intertwined nature of religion and history is important to the Japanese people to this very day. At Kokugakuin University museum they also displayed examples of religious food offerings for different deities alongside archaeological museum items, this goes even further to show the ingrained religiosity of not only Japanese history but prehistory.

However this attitude is not exclusive to all religious items. On day seven when we visited the Mori Art Museum, we saw religious statues such as that of Kannon and Buddha next to non-religious items and treated in no special or sacred way – we were able to photograph them freely. This was also the case on day six when we visited the Tokyo National Museum's Asian Gallery. Such items are a big draw for tourists and visitors therefore need to have access to them. In this way religion is actually used to advance tourism as we saw on day three when we visited the Toshogu shrine which was filled with visitors queuing to circle Ieyasu's resting place and while some people bowed and said respectful words many people stood around taking photos and chatting. There was a very relaxed attitude to this sacred place. During this visit we were also advised to buy a special amulet from the shop on the way down. This was repeated again within another of

the buildings in the shrine as there was a counter selling amulets for a number of reasons - health/ luck/ warding away evil spirits/ safe drive. This shows that there is a commercial aspect targeted at tourists at these religious sites and they are exclusive to the Japanese worshippers.

Another interesting aspect of religion within Japanese culture and heritage was the lack of competition between different religions and even the combination of religions that happens. At Buddhist temples there was often a Shinto shrine and vice versa. People could go and visit both to pray and pay respects and there were no strict rules and dividing lines as with many world religions. On day seven at the Mori Art Museum there was an interesting painting that involved both Buddhism and Hindu aspects, as well as mandalas combining the same themes. These display deities from both religious and attempt to comprehend cosmology and the universe through an Asian religious perspective. These exhibition pieces used the religious perspective of two Asian religions to explore an outside theme, further displaying the cooperative nature of religions within Japan. Another interesting aspect of religion and Japanese heritage was the importance of aesthetics and the grand beauty of religious structure. Places such as the Toshogu shrine was packed with tourists as it features beautiful architecture and pagodas. However on day six when we visited Ueno Park, which was not well managed and rather run down, we could see that the monuments and shrines to important figures, often of a religious nature, went unnoticed and were disregarded. In an attempt to improve the park they warped one of the trees and reconstructed the Full Moon Pine depicted in one of Hiroshige Utagawa' s works in attempt to aestheticise the area. In conclusion, religion remains a huge part of Japanese history even as it happens, but it also happens to be a big draw for tourists who have never experienced this more harmonious religious system. These temples and shrines are kept beautiful in devotion to the deities they commemorate but also in a move to draw more visitors and interest to these areas.

# 4 受講者レポート 2

大谷 ちひろ、川口 真、山口 陽子、岡崎 咲弥、松尾 晶穂

## 東京の部

### ▶1日目－9月9日（金）

まずは顔合わせ。英語で自己紹介をしたのち、ホテルへ向かう。ホテルの一室に集まって、少し話した後に、希望者が多かったので全員で浅草へ行った。雷門、仲見世通り、浅草寺を過ぎ、近くのミュージアムで時間を過ごした。青森の畑作地域の近代化以前の衣服についての展示で、実際に触ってみることもできた。まだ貧しかった時代にも寒さを耐えるには到底薄すぎるとしか思えないほどの厚さの衣服だったが、何代にもわたって大切に使われ受け継がれてきたことが垣間見られた。ホテルに戻り、晩御飯。ここで、ミュージアムにて「もったいない」の精神を学んだinternational studentsの提案で（笑）、夕食で食べきれなかったおかずを「お持ち帰り」することに！食事の後には、上野駅周辺を探索。アメヤ横丁やドンキホーテに大興奮しながら、international studentsには日本の文化を楽しんでもらえたようだった。

### ▶2日目－9月10日（土）

和食の朝食を頂き、東大へ。午前中は設樂先生による講義（旧石器時代から古墳時代の日本、および縄文・弥生文化に関して）を聞き、その足で文学部所有の展示品を見せてもらった。普段は公開されていない部屋で、様々な貴重なものが展示されていた。縄文のイヤリングから、普通の石と石器の見分け方、講義で聞いた弥生土器や縄文土器の解説等、様々なお話を聞くことができた。海外メンバーも熱心に聞いていたし、私たち東大メンバーにとっても初めてで、とても興味深く面白い内容であった。

両国で海鮮丼の昼食を取ったのち、江戸東京博物館へ向かう。約2時間を過ごし、江戸ゾーンと東京ゾーンを見て回った。途中、曲芸のイベントがあり、そこでinternational studentsの一人がステージに呼ばれ、芸を競い、一番になっていた（笑）。晩御飯はホテルにて豪華な和食のお弁当を頂いた。夜には皆で集まって「The Great British Bake Off」というイギリスの料理バラエティ番組を視聴しながら、楽しい時間を過ごした。

### ▶3日目－9月11日（日）

早めにホテルを出て、イローナ先生と浅草で落ち合い、日光へ。日光は少し肌寒い。徳川家康、家光と関係のある場所として先生から説明を受け、いよいよ東照宮へと上っていく。入ってすぐにオランダ人から家光に捧げられた大きなランプがあったが、家紋が逆向きであり（笑）、家光は笑って許したという。東照宮、日光山総本堂三仏堂、日光東照宮宝物館を見学した。日光山総本堂三仏堂は修復中で、足場に登って7階からその様子を見学することができた。7階からは日光とその周りの街並みも一望できた。一通り日光東照宮とその他の施設を見学したあと、バスで駅まで戻り、名物のかき氷を皆で食した。海外メンバーは初めてのかき氷体験であり、気に入った様子であった。今日は丸一日、日光見学であった。

### ▶4日目－9月12日（月）

朝食は和食。ホテルの朝食はとても美味で、また量も多く朝から満腹になる。出発まで時間があったので、海外メンバーのサブリナの提案で、数人でヨガをして体を温めた。ホテルを出て日暮里駅に向かい、そこから2つのグループに分かれて散策開始。私のグループは、谷中銀座～千駄木～根津神社というルートを回った。谷中銀座の昔ながらの商店街はとても趣があり、歩くだけでも楽しめた。大学芋を皆で食べたり、かりんとうの試食をしたり、陶器と小物とお茶を売っているお店に入ったりと、谷中銀座を堪能した。根津神社を回ったのち、千駄木で名物（？）のカレーうどんを食す。いっぺんにカレーもうどんも味わえる「カレーうどん」は、海外メンバーに好評だったようだ。昔ながらの煎餅のお店にも立ち寄り、ようやく他のグループと合流。六義園に向かった（このプログラムでは本当によく歩く。今日は13000歩を歩いた）。六義園を満喫した後、近くの東洋文庫ミュージアムへ。日本文学が外国語に翻訳され、海外に受け入れられてきた歴史を学んだ。また、国宝の（！）史記が展示されており、句読点の解読の仕方も解説してあったので、自身で読むこともできた。また、私が聞いていたのとは違うあらすじの浦島太郎物語の絵巻や浮世絵など、非常に興味深い東洋の書物の展示が数多くあった。

### ▶5日目－9月13日（火）

東京でのプログラムも折り返しの5日目である。今日は残念ながらの雨。まず、國學院大學博物館を訪れた。特別展の他、神道関連の展示、縄文・弥生・古墳時代の土器や土偶の展示などがあった。イローナ先生の解説の下、約2時間をじっくりと過ごした。國學院大學の食堂で昼食をとり、雨天のため近くの山種美術館に向かった。ここでは普段、明治以降の近代的な作

品が展示されているようだが、今日は特別版で、江戸の浮世絵の特別展示であった。広重の浮世絵のぼかしがきれいに残っている貴重な絵を鑑賞することができたのは特に印象的であった。他にも、浮世絵の中では消えやすい紫色がきれいに残っている絵、東海道五十三次、歌麿の美人画などを、ガイドの方に解説していただいた。その後、渋谷のスクランブル交差点の見学と岡本太郎の絵の鑑賞をし、一日を終えた。夕食後には一部のメンバーと共に東京都庁に赴き、雨の東京の夜景を楽しんだりもした。

### ▶6日目－9月14日（水）

今日のプログラムは、東京国立博物館と自由時間。博物館に行く道で、上野公園の考古学的な価値を松田先生に教えていただいた。公園にはなんと、古墳があったのだが（！）、それに関する説明の看板も小さく、管理も行き届いてないようで、教えてもらわなければただの丘として通り過ぎてしまうほどであった。東京国立博物館では日本パート、考古学パート、東アジアパートがあり、1時間～2時間を各パートで使って見学をした。松田先生に埴輪の性別の見分け方を教えていただいたのだが、乳房の有無と髪型で見分けるとのことであった。猿の埴輪などもあり、非常に面白かった。東京藝術大学の食堂で昼食を頂いたのち、自由時間に。希望者で歌舞伎を見に行った。去年のアクションのある話とは違い、今年は男女の愛と悲劇を描く、少し複雑かつ動きのない話で、やや退屈に感じる部分と、しかし話が展開して面白いと感じる部分とがあった。しかしいずれにせよ、衣装などは大変美しく、いい経験をさせて頂いたと感じる。

### ▶7日目－9月15日（木）

いよいよ東京滞在も今日でラスト。天気は曇りで暑すぎず、良い。朝食後にサブリナによるヨガ教室をして、サントリー美術館に向かう。鈴木其一展が開催されており、朝顔図を見ることができた。髙岸先生によると、当時青色は高価で、緑も比較的高価であったから、朝顔図はなかなか費用のかかった絵ということだった。金箔よりも高いほどだというから驚きである。次に国立新美術館のダリ展に足を運んだ。ダリの絵はとても興味深く、また簡単には理解できない不思議な絵で、あまりにも多くの展示数だったため時間が足りないと感じるほどであった。その後、森美術館へ。非常に盛りだくさんの一日である。ここでは宇宙と芸術展が開催されており、古代から人類が宇宙に思いをはせてきたことが、絵画や宗教画を通して感じられた。美術館を見た後には、展望台へ登り、森ビル屋上から東京が一望できた。明日から大自然の北海道であることを考えると、この東京の景色とのギャップもなかなか面白く感じられそうである。

文責：大谷 ちひろ

## 北海道の部

### ▶8日目－9月16日（金）

今朝は早めに集合して空港へ。羽田空港には自動荷物預り機があり、私も含め海外学生・日本人学生ともに初めて利用する人が多く、2020年東京オリンピックのための整備のことなどで会話が弾んだ。

女満別空港へは2時間弱のフライトで到着した。風が冷たいが、曇りの東京とあまり変わらず涼しくて過ごしやすい気候でほっとした。何より広い空ときれいな空気が嬉しい。期待に胸を膨らませつつ常呂へ向かった。北海道の平野らしくダイズやジャガイモ、タマネギ、イネなどが車の窓から眺められた。今年北海道は8月に4回も台風にみまわれ、常呂川も上流では浸水の被害があった。飛行機からも濁った川が見えていたが、道路わきの畑では、まだ水につかり一部が枯れてしまっている野菜も見受けられた。東京にいたときにはテレビの中の出来事だったことを目の当たりにした。

夕方からは全員で野菜を切りラムを解凍してジンギスカンでwelcome partyをした。地元の方々もいらして、お持ちくださったお酒やお刺身、果物に舌鼓を打った。常呂の食料自給率3000％には海外学生・日本人学生ともに驚きの声を上げた。地方によりこれだけ食料自給率に差があるとは知らなかった。

夜には何人かの学生で連れ立って散歩に出、真っ暗な中フクロウの声を聞くなど、早速北海道の自然を体感した。明日から北海道の部本番。すでに学んだことは多いが、これからの活動が楽しみだ。

### ▶9日目－9月17日（土）

今日はかなり寒かったが朝からジョギングに行く人もおり、爽やかな一日のはじまりとなった。常呂2日目の朝食のみ各自用意ということだったが、自然とみんなで協力しながら用意した。これからは東京の部以上に共同生活になるので、良いスタートになったと思う。

午前は熊木先生による北海道の縄文～考古学上のアイヌ文化までのレクチャーを受けた後、東京大学文学部が運営する常呂資料陳列館を見学した。東大は1957年から常呂の遺跡の発掘を行っており、土器編年の標識土器も展示されていた。北海道の土器について、東京の部の博物館で見た土師器・須恵器との相違点、一般の縄文土器との共通点をよく見てとることができた。本州の影響を受けた擦文文化と、海洋適応してやってきた民族によってつくられたオホーツク文化が、トビニタイ式土器で融合している様子は特に興味深いものだった。

おいしいお弁当をいただいた後は土器片の接合体験を行った。今年はたまたま海外学生が全員考古学専攻だったので、Please tell me the knacks for matching pottery pieces!（土器接合のコツを教えて！）、Be the pottery!（土器になって！） などと言って笑いあった。さまざまな文様の土器片に直接ふれるのは、日本人学生にとっては初めての体験で難しくもあるが、楽しかったし、考古学への興味をかきたてられた。

午後は近現代の資料を展示する常呂町郷土資料館に行った。教科書でしかみたことのない機械やおもちゃを直接見ることができて、海外学生・日本人学生ともに大いに楽しんだ。私は海外学生の一人に「おき火アイロン（中に石炭を入れて使うアイロン）」の使い方を教えてもらった。

その後、学生宿舎のある丘のふもとの常呂遺跡の館を訪ねた。細かい土器編年が展示されており、午前中に土器接合体験で組み合わせたのは続縄文時代の後北式C1式／C2・D式土器および宇津内Ⅱa式土器であるように思われた。

夕食はお好み焼き、その後ヨガや9人一列肩もみ、更には海外学生に教えてもらって忍者ゲームもして盛り上がった。英語しりとりもしたがこれは日本人学生には知らない単語が多く、そのたびにWhat’s that?（それなに？）と訊き、よい交流ができた。

### ▶10日目－9月18日（日）

今日の午前中は宿舎隣のところ埋蔵文化財センターで勾玉製作を体験した。私たちが使用したのは滑石だが、実際には硬度にして滑石1、ダイアモンド10に対して、硬度6.5～7の翡翠製のものが出土している。宝石にできる翡翠の産地が新潟などに限られているにもかかわらず北海道でも出土しているということが交易の存在を物語る重要なポイントだった。この体験では紙やすりを用いたが、実際に用いられた溝のついた砥石はすでに國學院大學の博物館で見学している。出土勾玉例を参考に、みんな個性的なこだわりの勾玉を製作した。

午後は、明日発掘する大島2遺跡に関するレクチャーを受けた。いつもは図録でしか見られないような土器片や炭化材を間近でみるのは心躍るものだった。

今日は常呂町内の遺跡めぐりも行った。復元された竪穴式住居のあるところ遺跡の森（ここは蚊との闘いで、学生同士ずっとたたき合っていた）、国指定の史跡・貝塚を順に見た。多くの竪穴式住居跡の窪地と開拓時代の道、遺跡の真上の畑を目にし、考古学と現代生活の共存の難しさを感じた。また大きな川の付近を車で通った際には遡上するサケをせき止めて獲る柵の仕掛けを見た。この仕掛けは縄文時代に川底だった遺跡からも見つかっており、古代から続く漁法であると思うと風景が一層興味深いものに思われた。

最後にワッカ原生花園を見学した。とにかく実のなったハマナスばかりだったが、サロマ湖の絶景を見、潮の香りをかぎ、気持ちよく学生宿舎に戻った。今夜はイローナ先生と学生とで遅くまで論文や人脈のことなどについてはなし、14日間にわたる合宿ならではの有意義な経験ができた。

### ▶11日目－9月19日（月）

本日は待ちに待ったexcavation day!　私を含め何人かはこれが初めての発掘体験だ。表土をスコップで除くところから始め、まだまだ完全な発掘には日を要するものの、土器片一つといくつかの炭化材が見つかった。木の根・草の根には苦戦したが、概して涼しく気持ちの良い発掘日和だった。

夕食には地元の方が持ってきてくださった具だくさんのタイカレーとホタテ貝をいただいた。イギリスの学生曰く、scallop（ホタテ貝）は日本以上に高級だそうだ。ご厚意に感謝したい。

夜は宿舎前で花火をした。海外学生と私と花火の持ち方が違っていて驚いた。こんなところにも習慣の違いがあらわれていた。

### ▶12日目－9月20日（火）

今日は知床方面へ向かった。まず見学したチャシコツ岬上遺跡は海に突き出た岬の上にある。急な斜面をのぼるのはかなりスリリングだったが、緑の木の葉そよぐ林に竪穴式住居が点在しているのは美しい光景だった。昨日の発掘体験はザクザク掘り進められる深さまでしか行わなかったが、チャシコツ岬上遺跡では刷毛やブロワー（土屑を吹き飛ばす器具）を用いる繊細な作業をしていた。2日あわせて浅いところから深いところまで発掘のプロセスを概観することができた。それにしてもよくもこんな高いところに居を定めたものだ、水はどこからどうやって運んだのだろう、と疑問が尽きなかった。

世界遺産の知床半島では道端まで出てきたシカや、高くなるにつれて変わる植生を見ることができた。知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝と、きれいな景色をいくつも眺めることができた。手つかずの自然も素晴らしかったが、半島に至るまでに通過した広大な畑も目を見張るものだった。

また、帰りにはサケの遡上をみられるところへ寄った。目を凝らすと水底に魚の影が数多く認められた。サケ（実際にはマスだったらしいが）が命がけで産卵のため川を上ってくる様子は胸を打つものである。

長い距離を運転してくださった先生方はさぞかしお疲れのことでしょう。ありがとうございました。

### ▶13日目－9月21日（水）

今日は一日中網走方面を見学した。北海道立北方民族博物館では、北海道の民族だけでなく世界中の北方民族に関する展示を行っている。興味深かったのは、純粋だが今はなき文物ではなく、100年ほど前から今日に至る生活の品々も展示されていることだ。サマープログラムでは遺跡から出てくる土器や骨角器などをもとに古代の生活がいかなるものであったかを中心に考えてきた。一方、ここの博物館では古くから続く文化を持った民族が現代の生産物（機械織りされた合成繊維の布切れやショッキングピンクの塗料など）をいかに伝統的な衣服・装飾に取り入れているか、ということの一端を見ることができた。

網走市立郷土博物館では、多くの動物標本をみた。古代人が石器や骨角器の銛で捕っていた海獣の大きさを体感したり、こちらで目にしたキツネ・オジロワシ・シカの剥製、目にできなかったヒグマやフクロウの剥製を観察したりした。

博物館網走監獄は、屯田兵以前からの監獄・刑務所の歴史を解説していた。マネキンは薄気味悪かったが、大変学ぶことが多かった。北海道の部前半に林の中で竪穴式住居を横切って開拓し造成された道路の跡を見ていただけに、感慨深かった。

スケジュールの最後に、北海道の考古学研究においてとても重要なモヨロ貝塚館も見学したが、もうみんな竪穴式住居跡の窪地は見慣れてしまい、「いつものですね」と言っていた。それだけこのプログラムで集中的に多くの遺跡を見学する機会を与えて頂いたということなのだろう。

### ▶14日目－9月22日（木）

今日はところ埋蔵文化財センターでイローナ先生のレクチャーを受けた。このレクチャーは縄文文化が現代社会でどのよう

に受け入れられているか、どのような魅力を人々が感じ、また縄文文化に倣ったものを作り出しているかに関するものだった。商業的な面・芸術的な面・政治的な面などで現代人が考古学に触れる機会は意外に多いことを感じた。私自身歴史文化学科に所属し、過去の研究が現在にどう生きてくるのかに関心も疑問も持っている。先生の講義はこれから取り組むことを考えるうえでも示唆に富むものだった。

午後はレポートの執筆と修了式、その後でfarewell partyが行われた。

## プログラムを終えて

参加する前には長いと感じていた二週間のプログラムも、あっという間に過ぎてしまった。海外学生4人、日本人学生5人、良いメンバーに恵まれ毎日楽しく過ごすことができた。受験制度の話をしたり、一緒にヨガやサイクリングをしたり、またfantasticなパンを焼いてくれた学生も、funnyなダンスを披露してくれた学生もいた。

このプログラムでは東京でも北海道でも集中的に数多くの考古系・非考古系の遺跡・博物館をめぐった。そのため東京で見たことと北海道で体験することが色々な場面で結びついてわくわくする経験ができた。

ずっと引率して英語の解説や魚の下処理をしてくださった先生方、事務の方々には感謝してもしきれない。プログラムを運営してくださった皆様、本当にありがとうございました。

文責：岡崎　咲弥

## テーマ別レポート

考古学を専門としていない我々にとって、この文学部夏期特別プログラムは、様々な発見と出会いの連続であった。東京と北海道合わせて我々が回った博物館の数は実に20以上にのぼり、また遺跡の発掘体験や土器の接合、勾玉づくりなどの経験を通じて、我々は古代のロマンに触れることが出来た。その中でそれぞれが感じたことは、過去との出会い、博物館の展示や海外の学生との交流など、実に多種多様である。ここでは、各学生が最も印象に残ったことを中心にまとめる。

### 1．現在と過去との対話から

私が様々な時代や場所の展示物を見て気づかされたのは、人間の飽くなきまでの美に対する追求である。

大胆な装飾が施された縄文時代の火焔土器や常呂の資料館で見たオホーツク文化の精緻なクマの骨像、様々な技巧を凝らして人々の多様な暮らしを鮮やかに描いた広重の浮世絵。様々な博物館や美術館を訪れる中で、私は多くの「美」に触れることができた。説明を受ける中で、一つ一つの「美」の裏には多くのドラマがあることを知った。例えば、教科書でも博物館でもよく見かける勾玉は、縄文時代後期にはヒスイという非常に硬い石材で作られていた。数時間かけても数ミリしか削れないほど硬いらしい。しかし、その硬い石材をなんとか削って、勾玉を生み出していた。非常に労苦をともなう作業なのである。何がそこまで縄文時代の人々を勾玉作りに駆り立てていたのだろうか。自らも滑石という柔らかな石材を使って勾玉製作を行う中で感じたのは、美しいものを作りたい、身につけたいという単純な欲望である。縄文時代の人々が祭祀のために用いたとしても、実際どのような思いで勾玉を作っていたのかはわからない。だが、現代人が装飾品として美しいものを身につけ、傍におきたいと思う気持ちとどこか関係しているのかもしれない。

もっとも、何を「美」とするかは時代によってめまぐるしく動く。それぞれの時代の人々がもっていた世界観は異なるからだ。イローナ・バウシュ先生の講義では、縄文人はタトゥーをしていたものの、現在ではタトゥーは忌むべきものとしてみなされているために、博物館の展示ではタトゥーは入れられていないという事例が紹介されていた。現在の尺度で過去を図ることは難しいのだ。

しかし、「美」を追い求める人間の姿はどの時代にも変わらないように見える。博物館や美術館で多くの展示物を見るなかで、一つの作品の背景には時代の影響や技術の発展、異なる文化との出会いがあり、また一つの作品が次なる作品につながっている様子を見ることができた。言い換えれば、それぞれの「美」を可能にしたのは、それまで蓄積してきた人知の集合であり人々の交流であるのだ。

人間はどこか過去との繋がりのなかで生きている。古代の人々との微かで確かな繋がりに思いを馳せた今回のプログラムであった。

文責：川 口　　真

### 2．ミュージアムの見方

振り返るに、このプログラムでは多くのミュージアムを訪れた。ここでは、その中でのミュージアムの見方の変化について述べる。

まず、この短期間にかつてないほど多くのミュージアムを訪れたため、特段意識するわけでもないがそれぞれを比較するようになった。東京の部の最終日には三館のミュージアムを一日で訪れるなど、プログラムの密度の濃さに参加した学生全員が驚いていた。そうしたプログラムをこなす中で、各ミュージアムの特色が浮かび上がった。一つ一つの展示に説明がほとんど添えられない所もあれば、タッチパネル等を利用し丁寧に解説する所もあった。同じ石鏃を展示するにしても、どこまでどのように説明するのかにはかなり差があった。音声ガイドの値段や英語版の有無もそれぞれ異なり、より多くのミュージアムを訪れれば訪れるほど、様々な点における差異に目が向いた。

また、講義や体験があったため、それがなかった時とは大きく異なる感覚で展示物を見ることができた。例えば、土器標本に対する見方が変わった。土器接合体験を経た後に訪れた博物館では、小さな欠片により複雑に構成されている土器を見れば、組み上げた人の苦労を思われ、また土器の保存状態の違いが何を意味するのかについて考えるようになっていた。自分自身が四苦八苦して土器の欠片をつなげていくという経験がなければ、そんなところに意識を向けるのは難しい。

まとめると、「比較」と「体験による意識の変化」を実感を伴って捉えられたと言える。この2つは体得して初めて気づくような視点であり、まだ気づいていない視点の存在も示唆している。

文責：松 尾　晶 穂

## 3．「他者」と「わたしたち」

海外からの学生と共に、考古学などの学習をするこのプログラムにおいて、我々はそれぞれ過去に生きた人々、海外に生きる人々という、共に異なる文化の中で暮らす人たちと出会った。その中で、我々は彼等の「他者」としての側面と、我々と何ら変わらない「わたしたち」としての側面とに触れ合った。ここでは、このうち海外の学生との交流において感じた、「他者」として、「わたしたち」としての両側面について述べる。

### 「他者」として

我々と海外の学生との最大の壁は、おそらく言語の違いであろう。今年は、日本語が話せる学生もイギリスから参加していたとはいえ、英語という異なる言葉でコミュニケーションをとることの難しさを感じずにはいられなかった。また、その他にも、食文化や、大学の制度など、生活の中にも異なる点がいくつもあった。しかし、言語や生活におけるこれらの相違点は、我々と彼らを「他人」として隔てるのではなく、むしろ、我々に新しい世界を知らしめ、自分の世界を拡張させるものであった。英語が出来なければもっと英語がわかるようになりたいと思うように、彼らの「他者性」は、我々がいままで属していた世界の狭さを映し、我々の認識をより広いものへとつなげてくれた。確かに我々と海外の学生は互いに「他者」としての側面を持っている。しかし、彼らと我々の接触は、お互いが「他者」であるが故に、より彼らに近づき自己の認識を拡張しようとする刺激を我々に与えてくれるのである。

### 「わたしたち」として

既に述べたように、我々と海外の学生たちは、互いに異なる文化圏に属している。しかし、彼らと我々の間には、「他者」としての側面以上に、互いに何ら変わらない、「わたしたち」として共感・共有できるものが沢山あった。例え言葉が多少通じなくても、共においしいものを食べて歓び、綺麗なものを見て感動したり、おかしい話に笑ったりする時、我々の間には何の隔たりも相違もない。「海外の学生」としてでも「日本の学生」としてでもなく、互いがひとりひとり異なる個性を持つ「友人」として接することが出来る。こんな当然のことを、時に我々は忘れてしまっているように思う。確かに、話す言語も違うし、全然違う環境で育った人と接するとなると、最初は緊張してしまう。しかし、話してみれば、彼らと我々の間には、相違点以上に共通性の方が沢山あることに気付く。これらの共通性はきっと、今回のプログラムに参加した学生たちとの間にだけとどまるものではなく、この先に出会う人たちとも共有できるものであろう。

文責：山口　陽子

山上あかね撮影

# まとめと今後の展望

東京大学大学院人文社会系研究科　副研究科長
佐 藤 宏 之

文学部夏期特別プログラムも3年目となり、すっかり定着した感がある。昨年までの2回は、8月前半の猛暑の中で実施していたため、イギリスやヨーロッパから来た学生たちにはことのほか暑さがこたえ、谷中・根津・千駄ヶ谷、通称谷根千の下町グループワークにも若干支障が出ていたが、今年はその反省から、実施時期を9月9日から23日までの15日間にずらしたので、少しは涼しい東京を楽しんでいただいたものと思う。

本プログラムは、主として考古学と文化資源学に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。今年も前半の東京の部では、東京の代表的な博物館（東京国立博物館・江戸東京博物館等）や主要大学の博物館（東大総合研究博物館・國學院大学博物館等）、美術館（サントリー美術館・国立新美術館・森美術館等）の施設や展示を見学し、1日日光に出かけた。希望者は、歌舞伎座にも赴いてもらった。

全期間を通じて、東大学部生と外国からの参加学生を区別せず、東京では上野のホテルで、後半の人文社会系研究科付属常呂実習施設では学生宿舎で同室してもらった。最初はどこかぎこちなかった学生たちも、2週間にわたって同室する体験を通じて、次第にお互いを理解しあい、最後には人生観までも英語で語り合うことができるようになったようだ。座学・実習はもちろん、日常会話は全て英語が基本である。

後半の常呂では、道東という立地から、一転して朝晩は肌寒く感じるほどの冷涼な天候のもと、北海道の先住民が残した遺跡の体験発掘や附属の資料陳列館を利用した体験学習、地域の博物館活動に参画することを通じた社会連携の具体を知る機会を得た。講義や実習見学では、東大生もほとんど知らない北海道の独特の歴史を、実際の遺跡や遺物を前にして、文字通り体感しながら学ぶことができたはずである。地元との交流会では、食べきれないほどの豊富な海産物・農産物が供されたバーベキューなども味わい、地域住民と肌を触れ合う貴重な機会もえられたことと思う。一部の希望者は、早朝漁船に同乗し、網起こしから魚種の選別に至るオホーツクの漁業も体験した。常呂実習施設での朝晩の食事は、買い出しから食器洗いまで、日欧双方の学生ペアによる自炊であり、交流の実を上げる格好の機会となった。

本プログラムの実施は、2015年1月に英国セインズベリー日本藝術研究所と文学部との間で締結した部局間国際交流協定に基づいている。夏は東京と常呂に英国やヨーロッパの学生（5人）を招いてプログラムを実施し、冬は英国に東大の学部生5人を同期間（15日間）派遣している。

すでに来年2月に実施予定の冬期特別プログラムの準備も開始されている。本プログラムは、文学部だけではなく、広く前期・後期課程の全学部に開放されているので、今回も多数の参加希望者があるだろう。毎回少しずつではあるが、より内容の濃いプログラムに改善していきたいと思う。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に深謝いたします。

# 東京大学大学院
# 人文社会系研究科・文学部

**東京大学大学院人文社会系研究科附属**
**北海文化研究常呂実習施設**

〒093-0216　北海道北見市常呂町字栄浦376



**東京大学 本郷キャンパス**

〒113-8654　文京区本郷7-3-1

**セインズベリー日本藝術研究所**

ノーフォーク州　ノリッチ

平成28年度
文学部夏期特別プログラム
（報告書）

編集発行　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-8654　東京都文京区本郷7-3-1

発 行 日　2016年12月20日

印　　刷　三鈴印刷株式会社

東大文

SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Culture
セインズベリー日本藝術研究所

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/